



中国式白タクに思う

柴生田 晴四
(経済倶楽部理事長)

▼日本各地の国際空港や有名観光地で、「中国式白タク」の横行が話題になっています。最近、中国人観光客の多くが、中国本土を出発する時点で配車サービスアプリを使って、在日中国人の「白タク」を契約、訪日すると指定の場所に「白タク」が出迎えてくれるサービスを受けています。料金が日本の正規タクシーよりも安いだけでなく、中国語でガイドもしてくれるのが好評です。

▼この背景には、中国においてインターネットを使った配車サービスが急速に普及している現実があります。配車アプリは、もともとアメリカのウーバーが開発したのですが、ウーバーの登場から3年後に始まった中国の配車サービスは、瞬く間に中国市場を席巻し、今では主要都市の都市交通にはなくてはならない存在になっています。いつでもどこでもスマホで最短の空車を探し出して利用できる利便性に加えて、運転手のプロフィールが登録され、利用者の評価が明らかにされていることで、かつては「黒車」と呼ばれてぼったくりの代名詞だった「白タク」が、信用を確立し、支払いも電子マネーで行われることで明朗会計も実現しました。

▼配車アプリサービスは、ライドシェアアプリサービスとも呼ばれるように、タクシーの配車に加えて、自家用車を使って他人を運ぶことを可能にしたのが特徴です。その意味で、自宅の部屋をインターネットアプリに登録して貸し出す「民泊」サービスと共通のシェアリングエコノミーの一形態です。いずれも利用者による評価で「悪貨」が駆逐され、品質の維持向上が行われます。

▼日本では、自家用車を使って他人から金銭を受け取る「白タク」行為は法律で禁じられています。その意味では、本国のサービスを日本の法律を無視して勝手に持ち込み、やりたい放題の中国人は非難されるべきでしょう。しかし、利用者の利益ではなく、業界の既得

権益の保護しか念頭になく、世界の趨勢から目を背け続ける日本の行政には、日本人自身が疑いの目を向けなければなりません。

▼米国経済の好調は、ITとインターネットサービスによって牽引されています。中国経済は過剰設備に苦しむ重厚長大産業が影を落としていますが、ITとインターネットサービス分野では次々と新興企業が生まれて急成長し、中国社会そのものを変えつつあります。しかし、日本は「観光立国」を標榜しながら、最先端のサービスに対しては門戸を閉ざしたままです。ITとインターネット、そして眠っている資源を活用するシェアエコノミーの推進によって、サービス産業の生産性向上を図るべきでしょう。